

蜂高織炎に対する可視総合光線療法

一般財団法人光線研究所
研究員 市川 博幸
所長 医学博士 黒田 一明

蜂高織炎（ほうかしきえん）は、皮膚及び皮下組織に起こる感染症で患部に発赤、腫れ、熱感、痛みが出現します。糖尿病やリンパ浮腫などの病気がある場合や種々の原因で免疫力や体力が低下していると重症化する場合があります。皮膚にこのような症状が出た場合は自己判断せずに病院を受診することも重要です。

今回は蜂高織炎について可視総合光線療法と病院の治療を併用し、良好な経過がみられた治療例を紹介します。

■蜂高織炎の原因

原因となる病原菌は皮膚に常在している黄色ブドウ球菌、連鎖球菌が一般的です。病原菌はケガの傷、床ずれ、水虫、湿疹などの患部から侵入します。発症部位としては、四肢の皮膚に多くみられます。患部の炎症は広範囲に広がり、皮膚表面には発赤、腫脹、熱感と触った時の疼痛がみられます。また、高齢者や体力が低下している人やリンパ浮腫がある場合、皮下組織に急速に炎症が広がり、全身の発熱を伴うと肺炎、敗血症、骨髄炎、関節炎、壊死性筋膜炎など重症化する場合があります。

蜂高織炎の病院での一般的な治療方法は安静と抗生剤の内服となります。症状が強い場合は抗生剤の点滴を行います。腫れが強い場合は患部を切開して排膿を促すこともあります。

■2007年米国の研究：創傷はビタミンDを介して自然治癒能力と抗菌ペプチド発現を促進させる

皮膚が傷ついたり、皮膚に細菌感染があると角化細胞が刺激され皮膚内でビタミンDが活性化され自然免疫を担うカテリシジンの分泌を促します。抗菌ペプチドの一種であるカテリシジン分泌が増加すると傷を速やかに治癒させたり、感染を抑えることとなります。この研究から皮膚の創傷や感染の治癒にはビタミンDが重要な役割を担っていることが理解できます。

■可視総合光線療法

光線療法の光と熱エネルギーは皮膚表面だけでなく、深層の皮下組織にも届くため病院の治療と併用することで、発赤、疼痛など炎症を速やかに鎮静化させます。光線療法の継続は熱エネルギーによる全身の血行を良くするとともに、光エネルギーによる殺菌作用、ビタミンD産生による免疫強化などの作用を介して症状の治癒を促進します。

さらに、蜂高織炎を起こしやすい糖尿病、リンゴ浮腫などがある場合でも光線療法はそれら疾患の症状を改善させる作用も期待できることから、蜂高織炎の予防にもつながります。

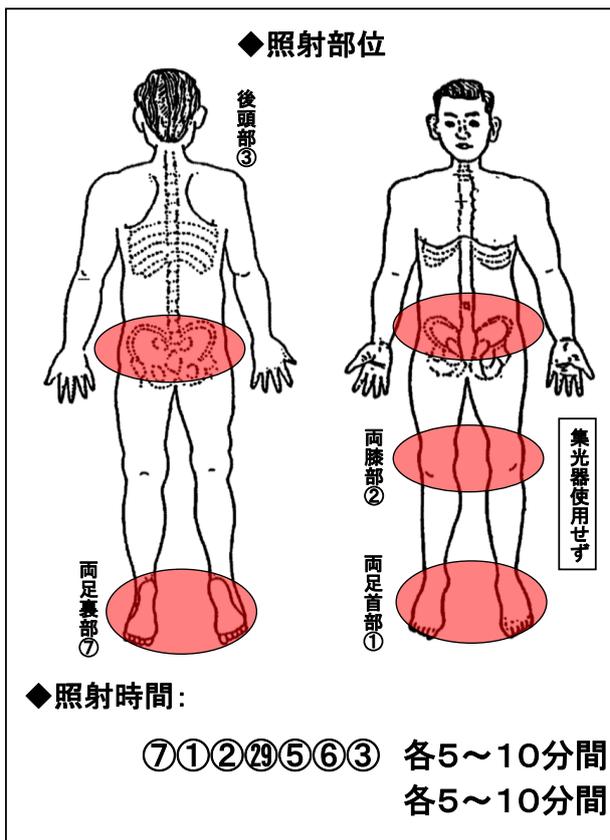
◆治療用カーボン：皮下組織の炎症なので3001-4008番、または1000-3001番を使用。痛みや腫れや発赤などの反応が強くなる場合は3001-5000番を使用。

ケガ、床ずれ、水虫や湿疹などがある場合は、各疾患に対する光線治療を行います。

◆照射部位・照射時間：基本照射部位である両足裏部⑦・両足首部①・両膝部②・腓腹筋部⑩・腹部⑤・腰部首（以上集光器使用せず）各5～10分間。後頭部③（1号集光器使用）5分間照射。

直接照射として赤みや腫れや痛みが出ている部位に適宜集光器を使用し各5～10分間照射。

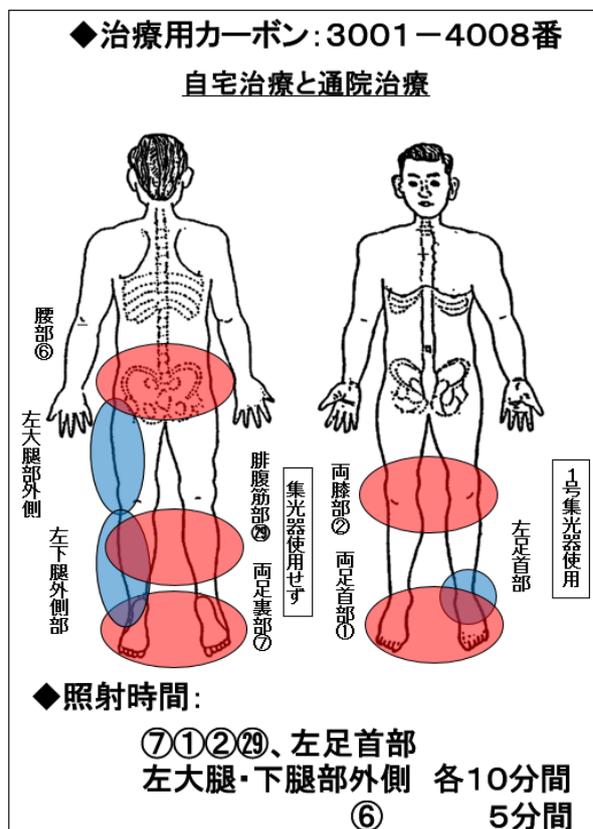
※痛みや腫れ、発赤などの反応が出る場合は照射距離を遠めにします。1号集光器であれば集光器の先端から50cm位、2号集光器であれば集光器の先端から30cm位の照射距離となります。



■治療例1 蜂窩織炎 85歳 男性

◆症状の経過：

82歳のとき、息切れやふらつき、体力低下がひどくなり病院で肺炎と診断された。病院の治療を受け症状は軽くなったが、疲れやすい体質は続いていた。知人の紹介で光線治療を始め、疲れやすい体質は改善された。85歳のとき、再度肺炎になり病院の治療で回復したが、それから数日後、左大腿部から左下肢が赤く腫れ、39度の発熱が出て病院で蜂窩織炎と診断された。3日間病院で点滴治療を受け退院できたが、下肢の赤みが残り、体力低下が著しく歩行も困難になってしまった、光線治療が役に立つと思い、当附属診療所を受診した。



(当所での治療法)

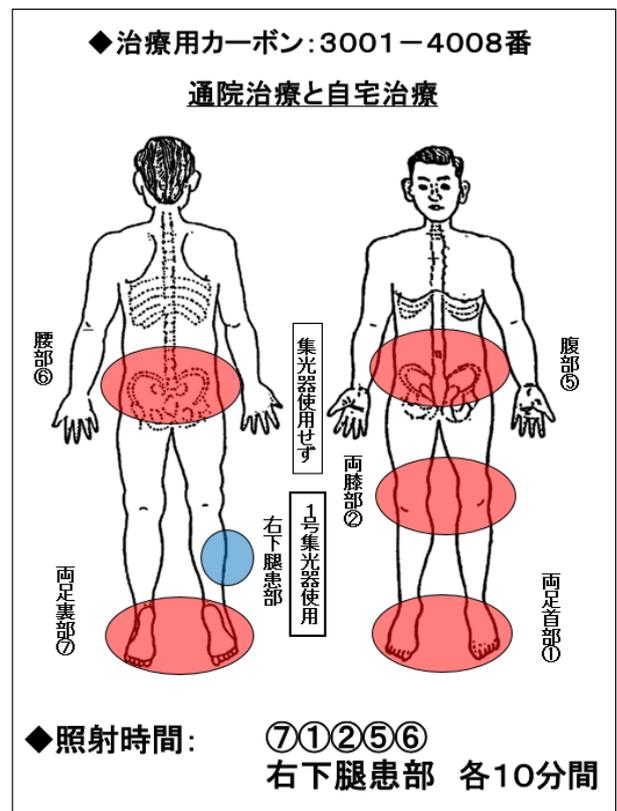


◆治療の経過：当所への通院治療と自宅治療の併用を始めた。治療2週間で皮膚の赤みが少し引き、痛みは軽減された。治療3週間後は歩行時に杖を使用しないと歩けなかったが、杖なしで歩けるようになった。治療1カ月後には皮膚の赤みも引き、時々感じていたチクツとした痛みもなくなった。治療を再開して3カ月後の時点では体力低下もなくなり、光線治療を続け元気に過ごしている。

■治療例2 蜂窩織炎 75歳 女性

◆症状の経過：

仕事の繁忙期で風邪を引き体調を崩してから身体のだるさが続いていた。歩行時に足が地面につくと右足に痛みが出るようになったので、時々使用していた光線治療器で両足裏を30分間照射し安静に過ごしていた。それから数日後、右足が赤く腫れ、翌日には赤みが広がり、痛みと熱感が増してきた。病院を受診すると蜂窩織炎と診断され抗生物質を服用して赤みは引いたが、歩行時の痛みはあまり改善されなかった。適切な光線治療を行うために当附属診療所を受診した。



(当所での治療法)



◆治療の経過：右下腿患部に照射をしたら翌日痛みが増したので、患部の照射は1日おきに行った。光線を始めて5日後には患部の反応がなくなったので毎日照射を行った。治療10日後には腫れと赤みが引き、2週間後には歩行時の痛みも改善し、仕事復帰することができた。光線治療は再発予防で現在も行っている。

■治療例3 蜂窩織炎による皮膚移植後 62歳 女性

◆症状の経過：

60歳の時ベッドに右足をぶつけて打撲した。整形外科を受診して骨折はなかったが、3日後に打撲患部が腫れて赤黒く変色し、発熱で体調が悪化。救急車で搬送され敗血症の診断で、5カ所の潰瘍を切開して膿を出し、3カ所植皮手術を受けた。退院後、植皮部位がヒリヒリ痛み膝の曲げ伸ばしも十分出来なくなってしまい困っていたら親戚に光線治療を紹介され、当附属診療所を受診した。

◆治療用カーボン：3001-4008番
通院治療と自宅治療

◆照射時間：⑦①②⑤⑥③
右大腿部外側
右下腿部外側 各10分間

(当所での治療法)



◆治療の経過：初回治療後は植皮部のピリピリ感が増したが、1週間で反応はなくなった。植皮部は洋服等で擦れるとピリピリしていたが、光線治療を始めて3週間でピリピリ感はほとんどなくなった。1カ月後、膝にあったつっぱり感が軽減され、曲げ伸ばしが少し楽になった。2カ月後にはつっぱり感がほとんどなくなり、膝の曲げ伸ばしがスムーズになり正座もできるようになった。2年経った現在、寒い日に植皮部分が短時間ピリピリと痛みが出たりするが、植皮部分がつっぱる事はなくきれいな状態を維持できている。